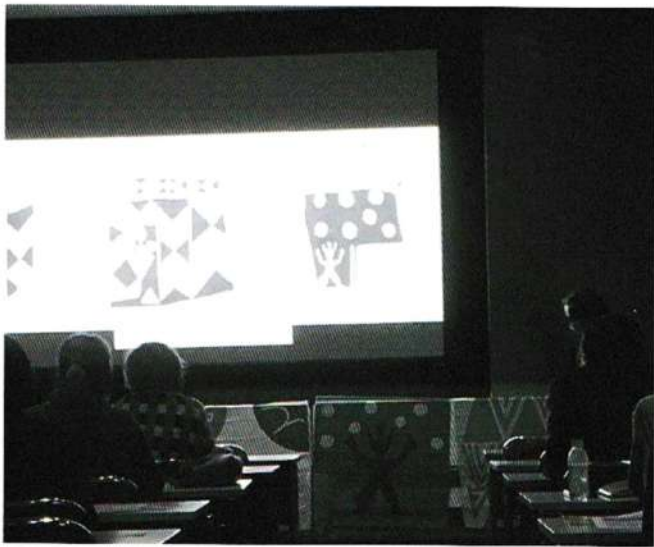


2021年度熊本県美術家連盟主催 美術講演会
2021年6月26日(土) 熊本県立美術館・本館文化交流室

演題 「今、改めて装飾古墳
熊本の美の原点にふれよう」

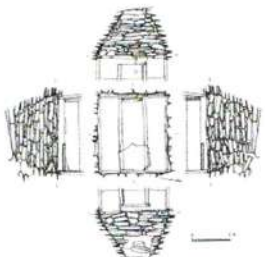
【講師】 木崎康弘先生



木崎康弘先生は、1956年、熊本県球磨郡錦町でお生まれになり、1980年に明治大学文学部史学地理学科考古学専攻を卒業されました。1982年に、熊本県文化財にお仕事をされ、県立装飾古墳館館長を定年まで勤められました(2017年3月)。この間、各地の発掘に携わりながら研究を続け、2000年に明治大学大学院で史学博士を取得されました。定年退職後は、八洲開発株式会社に勤務され、取締役で、木崎文化財研究室長です。次に、講演の概要を紹介いたします。

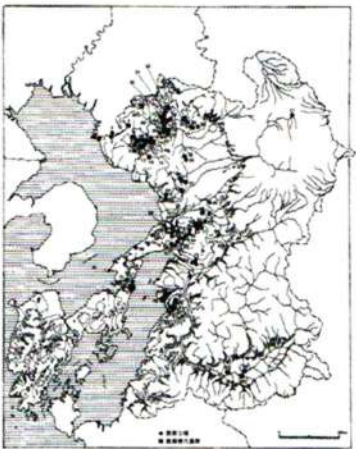
* *
今日は、(肥後の「装飾古墳」文化、今と昔を物語る)というタイトルでお話します。

「装飾古墳」は、日本の原始美術として、また、古代人の思想を表現したものである。その数は、全国で660基、熊本県に195基(うち、菊池川流域に117基)あり、全国の約30%です。その分布は、菊池川中流域、下流域、熊本平野北半部、宇土半島から緑川流域、八代海沿岸部、球磨川中流域に分けられます。(図1)



(図2) 小鼠蔵1号墳

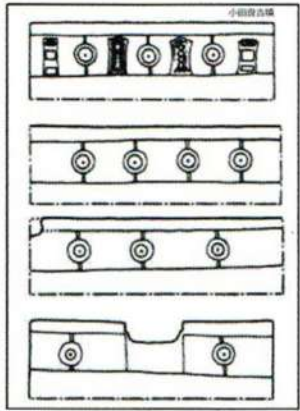
1999年作成の高木正文の「装飾古墳 編年」によると、最も古い年代の装飾古墳は、八代海沿岸です。5世紀初頭の八代市小鼠蔵1号墳(図2)と小鼠蔵3号墳で、装飾絵柄は、いずれも円文のみで、板面に1〜2個、弱く浅いタッチで線刻されています。



(図1) 熊本県装飾古墳分布

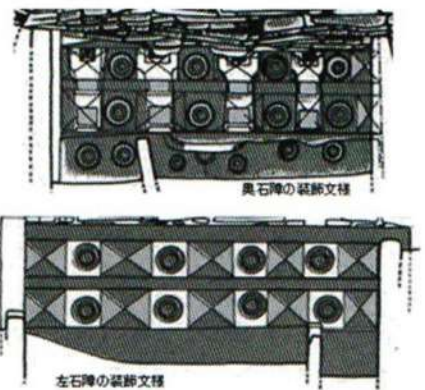
5世紀前半の大鼠蔵尾張宮古墳と大鼠蔵東麓1号墳の裝飾絵柄は、前者が円文3個、3区画された屍床の小口側石障にそれぞれ1個、後者では、石棺の長辺側板石に円文の他、弓、靱、三角版鋌留単甲、太刀の線刻があります。

5世紀中頃の宇城市小田良古墳は、宇土半島から緑川流域にある古墳群の一つで、初期の横穴式石室を内部主体とする古墳です。裝飾文様(図3)は、奥壁の石障に円文、楯、靱が、側壁や玄門側の外の石障には円文が等間隔に描かれていて、いずれも浮き彫りです。整然とした絵柄配置です。



(図3) 小田良古墳の裝飾模様

5世紀後半の熊本市千金甲1号墳は、肥後型の横穴式石室で、奥の石障(図4上)には、縦2段の同心円文と縦2段の×字文に靱を重ねた絵柄を交互に配置した裝飾文様が見られます。左右の石障(図4下)も、同じく2段の同心円文と縦2段の×字文が交互に配置されます。奥の石障の模様は、円文と楯がモチーフで、小田良古墳の踏襲は明らかです。また、左右の模様でも、×字文が小田良古墳の楯の表面に表現された稲菱形や対称する横V字形の線刻の組み合わせからきている可能性があり、それを楯の省略形と

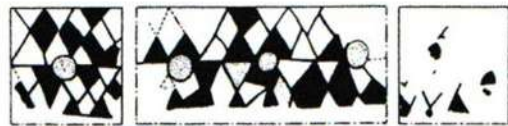


(図4) 千金甲1号墳の裝飾模様

考えると、小田良古墳のモチーフに繋がります。

千金甲1号墳の裝飾文様を受けて成立したのが、6世紀の菊池川流域の裝飾古墳群です。その嚆矢が和永町塚坊主古墳で、円文と三角文の絵柄を組み合わせた裝飾文様(図5)です。

円文は八代海沿岸の裝飾古墳に繋がるもので、三角文は、小田良古墳の楯の省略形の×字形文に繋がります。表現手法は、彩色主体へと変容しています。



(図5) 塚坊主古墳の裝飾模様

裝飾古墳の評価が確立するまで

最初に「裝飾古墳」に注目した人は、坪井正五郎です。坪井は、帝国大学助手の時の1888年、福岡県うきは市の日岡古墳で、石室を彩った裝飾文様を発見し、裝飾の評価を人類学的、民俗学的観点から行いました。

東京帝国大学 周辺での評価

佐藤傳藏は、帝国大学理科大学在学中(1892年~1895年)に、嘉島町井寺古墳で裝飾文様を発見し、同大学の人類学教室の画工(後に助手)、大野延太郎にその情報を提供しました。坪井が日岡古墳で裝飾文様を発見した数年(6年後か?)のことで、これによって裝飾文様が人類学的評価として大学周辺で定まりました。ただし、これ以上の議論は進みませんでした。

人類学的評価から 美術史的評価へ

東京帝国大学周辺での動きに置き換わるように美術史的評価が始まりました。それを進めたのが、1895年に、東京帝国大学理科大学から帝国博物館歴史部(現 東京国立博物館)に移った若林勝邦でした。若林は、移籍後の1899年の『考古学会雑誌』に「和永町江田船山古墳の出土品を取り上げました。この一部は、1900年のパリ万国博覧会でも紹介され、明治政府が出版した『HISTOIRE DE L'ART DU JAPON』(『日本美術史』)にも写真と解説文で紹介されています。さらに、『この本の和訳本が、『稿本日本帝国美術史』として農商務省から発行され、その前文に、この本は美術史として編纂された旨が書かれています。まさに、江田船山古墳出土品は、美術史上の極めて重要な資

料と目されたのです。また、日岡古墳や井寺古墳のことも掲載され、井寺古墳の裝飾文様も日本を代表する美術史の資料だとみなされました。

考古学的評価の 本格登場

1909年あるいは1910年、京都帝国大学文科大学講師の濱田耕作は、井寺古墳を訪れました。1916年9月に大学に開設された考古学講座の担当となりました。濱田は、早速、考古学講座が行う学術調査に取りかかり、その最初が井寺古墳でした。その思いを、「我が美術史上の冒頭を飾るべきものとして価値あるのみならず、我が考古学の研究、文化史の考察に最も肝要なる位置を有するもの」と述べ、裝飾古墳について美術史的評価とともに、考古学的評価も本格的に始めたのです。

明治期、大正期、 肥後の裝飾古墳に 関わった熊本の人々

福原は、執筆した「肥後雑件」で、氷池町の大野窟古墳、竜北高塚古墳の裝飾石棺、阿蘇市の上御倉古墳の石室などをとりあげ、いずれも、巧みなスケッチと解説で紹介しています。

■波多蔵

波多は、地歴科の教員でした。東京高等師範学校に学び、そこで、教授で、帝国博物館学芸委員で、考古学会会長に就いた三宅米吉と関わりを持つことで、考古学への関心を深めた。

■大正期の熊本県教育会 史跡調査部の面々

1915年~1927年、県は、県教育会に史跡調査部をつくり、史跡調査保存事業を行います。メンバーは、第一師範学校、済々黉、鎮西中学校などの

肥後の 「裝飾古墳」文化、 今からの景色

地歴、美術の教員、県属彫刻家などで、中に、角田政治、矢野寛、下林繁夫(日本画家)らがいました。彼らは、新たに裝飾古墳を発見し、その情報を濱田に伝えて、京都帝国大学の裝飾古墳調査をバックアップしました。この外、熊本中学校の美術教師、甲斐秀雄(日本画家)もいました。裝飾古墳が美術品、美術資料だと評価されていた証です。

墳全体を紹介する県立裝飾古墳館があります。両館とも、全国に誇れるものです。ぜひ、多くの方に見ていただき、何かを感じていただければ嬉しいです。グラフィックデザイナーのペドロ・山下さんは、美術館の裝飾古墳室で感動し、それをデザインのテーマとした熊本デザインプロジェクトを立ち上げ、さまざまな裝飾文様デザインの商品を開発しました。新たな風景として、時を超えた新しい何かが生まれてくるような気がします。